

“Guzman, Go Home” について

——Guzman's fantasy——

植 木 利 彦

岡山理科大学教養部

(昭和61年9月30日 受理)

序

第一次大戦後、社会制度も、貨幣価値も、政治体制も、ドイツ国民としての自信も誇りも大きく揺らぎ続けるドイツにあって、因習通りに父親の意見に従って法律家になることを拒否し、自らの手で自らの人生を切り開くことを望み、放浪の画家となったグスマンは、旧い世界に拘束されるのではなく、旧いドイツの国土に新しい世界の到来を夢見る若者の一人であった。彼は父親の家を出た時の心境を次のように述べている。I had taken the jump, ... like all rebellious youths.¹⁾ 唯、その新しい世界が如何なる世界であらねばならないかという具体的な観念が彼にあった訳ではない。彼に判ることは、それが旧い世界とは違う世界であらねばならないということだけである。

このような混乱期のドイツ国民に希望の星として輝いたのがナチズムの国家社会主義である。グスマンもこの過激な国家社会主義の嵐に巻き込まれ、現在はスペインの片田舎において、ガレージの経営者として細々と生きているのである。その彼が、オベハの町からアルメニアに向かう途中、車を故障させたクリスを助け、クリスを相手に、それ迄、彼が誰にも話したことの無い過去の深い心の傷を打ち明けたのは、英国の現社会体制に毒され、変化のない社会の中で従順に生きようになりかけている画家仲間の世界から、今は落ち着いているかもしれないが、革命によって新しい社会を生み出す可能性のあるアフリカへ向かう途中のクリスの中に、彼自身の若い頃の姿を見出したからに他ならない。従って、グスマンが、自分と同一視している、ほとんど口もきかないクリスに話す話は彼自身の独白であり、彼が歩まざるをえなかった不可抗力的な過程の正当化であるといえる。

彼は、打ち明け話の中で、彼自身の、ひいてはドイツ国民の論理的、合理的、知的な性質を非常に強調しているのである。そうした一面は、ドイツ車、フォルクスワーゲンを褒め讃える言葉のなかに集約されているといえるだろう。

'....Ah, England, no German car would be such a bad boy after three months. This Volkswagen I have had two years, and not a nut

and bolt has slipped out of place. I never boast about myself, but the Volkswagen is a good car, that my rational human being can trust. It is made with intelligence.²⁾

各々の民族は、独自の特性を備え持つものであり、グスマンのいうドイツ国民の合理性、論理性、理性を否定するものではないが、だからといって、他の民族がそのような特性を備えていないということにはならないし、ましてやそれによって民族間に優劣が存在するなどということは証明し難いことなのである。むしろドイツ国民が合理的、理知的、論理的であると安易に結論づけることのほうが非論理的、非合理的、非理知的であるといえるのではないだろうか？

この小論では、グスマンは、彼がいう程、合理的、論理的かつ理知的な人間であったかどうかを検討してみたい。

I

"I am rational" と絶えず主張しているグスマンには、実は言葉とは裏腹に非常に非論理的、非理知的な面があるように思われる。例えば、ナチズムへの傾倒がそれである。

第一次大戦敗戦後のドイツにおいて、社会が荒廃の嵐にもまれ、グスマンがいうように "No one was solid, ... No solidarity anywhere." であったことは容易に想像がつく。一時、大戦中の敵国であったアメリカを初めとする国々の経済援助で立ち直りかけたドイツ経済も、1929年に起こった世界大恐慌によって、又もやどん底の状態に陥ったのは歴史的事実である。そうした状態にあった時、自信も誇りも失ったドイツ国民に、ことの善し悪しは別にして、明確な進むべき道を示したヒトラーの極端な国粹主義に基づく国家社会主義はドイツ国民にかつての自信と誇りを取り戻させる大きな光明であったことは確かである。グスマンは当時のナチズムを次のように述べている。

' We were patriotic, England, and radical as well. Ah ! It is good when all the people go forward together. I know many artists who thought that anarchism was not enough to cure the griefs of the globe as they swung into black shirts. Children do not like the dark when they go to bed, and what can blame them ? Someone has to build a fire and put on lights It was a proud and noble time when loneliness was forgotten. , I was getting at last some look-on at my work, as well as finding the contentment of knowing a leader who pointed to me the fact that I was different from those people I had been through on my travels.³⁾

また当時のナチズムがドイツ国民に与えた心理的影響について、ハンス・ロートフェルスは次のように述べている。

しかし、それらすべてに加えてさらに、宣伝機構がみごとに狙いを定めた情動的衝動、またエセ理想主義的な引力、ないしは、「民族共同体」の幻想があったことは否定できないし、これらのものが、とくに多くの若者たちを魅了してしまったのである。また社会情勢好転の見せかけ、とくに失業者数の低下が、初期においては政権の心理的切札の役割を演じたのであり、またそれと同事情が、後年になってからのヒトラーの対外政治上での成功について当てはまることとなる。⁴⁾

そしてグスマンはあたかもドイツ国民がすべてナチズムの激流に押し流されていったかのごとく語るのである。

’ I was carried along like this *coñac* cork, floating down a big river. I couldn’t swim out of it, and in any case the river was so strong that I liked it, I liked being in it, strong river, because I was as light as a cork, and it would never carry me under. He ... he made us as light as a cork, England⁵⁾

後年、狂気のようにドイツ国民を押し流していったナチズムを彼は“Hitler made them (i.e. rationality and intelligence) kill each other in every man jackboot of us.”と表現している。あたかも目映いばかりの国家社会主義の熱狂の前にドイツ国民が理性も知性も無くし、時代の嵐に押し流されたのは不可抗力であり、当時の社会状況にその責任があったと言わんばかりである。しかし本当にそうだったのか？当時、ナチ党が選挙で得た得票率を見てみると、

ナチ党（NSDAP）は、権力掌握前には、投票の37%以上は一度も集められなかったこと（1932年7月）、ナチ党は、経済状態がいくらか好転するようにみえた1932年11月には33%に転落し、国会放火事件につづく、1933年3月の巧みに操作されたヒステリックな選挙のもとでさえも、やっと44%しかとれなかったこと、これらの事実、誰もが充分に知りうるし、確認できる事柄でもある。⁶⁾

という事実がある。更に、政権の座についても、次のような事実がある。

1933年1月30日、ヒトラーがワイマル憲法の形式をふんで政権を入手したとき、ナチスの権力の座はなお絶大なものではなく、また不動のものでもなかった。当時ナチスは議会で第一党になってはいたが、なお絶対多数を制していたわけではない。すでに32年7月の総選挙から、ヒトラーは政権の譲渡を強く要

求していたが、しかしナチスの単独政権を主張するかぎり、その実現の見込みが薄かった。⁷⁾

ナチ党は第一党になってはいたが、国民からの絶大な支持を受けていたのではない。何故なら反資本主義というナチズムは、資本家にとってナチスにたいする全面的な信頼を躊躇させるものであった。ましてや種族主義は、非論理的、非現実的、非人間的であり、誰もが受け入れられるものではない。

当時の社会状況が如何なるものであろうとも、またナチズムが目的を失った社会に新たな光明を与える灯火のごとく目に映ったとしても、その灯火が真の光明なのか、それとも鬼火であるのか、しっかり見極めることこそ論理的、知的な態度ではないのか？実際には、先に見てきたようにナチ党はドイツ国民から絶対的な支持を得ていたのではない。「白バラ」や「赤い聖歌隊」等のナチス抵抗グループも現にドイツ国内に存在していたし、その数は75万から120万人の間とされている。⁸⁾ 1933年の作為的な選挙ですら44%の得票率しかナチ党は得られなかったという事実は、少なくとも半数以上のドイツ国民がナチズムを受入なかったことを示している。たとえナチズムが熱狂的なものであっても、それを支持するか否かは個人の知性の問題であって、他に責任を転化しうるものではない。むしろ“... I went the whole way, to the extremes, right beyond the nether boundaries.”⁹⁾ というグスマンの知性を欠いた熱狂しやすい性格にその原因があったと見るべきだろう。

II

‘I should not have killed those people. I sat down to eat. They were hungry in the snow, and I could not stop myself. I could not tolerate the way they stood and looked, people who couldn’t work because they had no food to take into them. They kept looking, England, they kept looking. I thought: their life is agony. I will end it. If I feed them Christmas food for three months they will never be strong again. I wanted to help them out of their life and suffering, to get them peace, so that they would be no more cold and hungry. I fired my gun’¹⁰⁾

飢えと寒さに震えるユダヤ人、彼等はナチズムの唱える綱領に従えば、この地上から抹殺されるよう運命づけられているのである。グスマンの前にいるユダヤ人たちは、彼等の置かれている状況からすれば、十分な食料も、体を温める衣服も与えられることもないだろう。彼等が死ぬのは時間の問題である。このようにグスマンは、実に論理的にユダヤ人たちの将来を考えているのである。グスマンは、彼お得意の知性と論理を働かせて、ユダヤ

人たちをその苦痛から救ってやったのだ。だがその結果はどうであったか？

‘Rational and intelligent ! Everybody is being rational and intelligent. What beautiful words—but they have to be kept in a case and admired, ...’¹¹⁾

あたかも論理的、理知的に行動したことが、彼の不幸を招いたかのようにグスマンは語る。温かい衣服に身を包み、食事をしているグスマンを見る彼等の目付きは異常なものであったに相違ない。だがグスマンが認識しなければいけなかったことは、彼等の目付きの異常さや、哀れな姿ではなく、そのような状況を生みだした当時のドイツ国家の社会、政治体制の異常さ、人間の愚かさなのである。彼の目の前にある悲惨な状況は、人間の闘争心の誤った方向づけによって生じたものである。幾多の戦争を繰り返し、その度に限り無い不幸を生みだした人間の闘争心を正しい方向に導くことがグスマンの目にした不幸を、不幸な人々を救う道ではなかったか？戦争からは創造的なものは何も生まれて来ない。グスマンは、*The General* の将軍のようにこの事実を認識すべきであった。

Only blood and the ploughing of bombardment kept the land becoming desert, was all the justification he could find.¹²⁾

戦争は、如何なる大義名分によって飾りたてられようとも、その根底にあるものは人間の動物的本能への回帰であり、力の誇示にはかならない。

“War is and always has been mainly an expression of timeless atavism”“the boils in man’s nature feeling the occasional necessity of suppuration.”¹³⁾

“It is also nature’s way of filling the empty sack-bag of men’s ideals; it puts a machine-gun into their hands when a theory has been pushed to the limits of their intelligence.”¹⁴⁾

武力による戦いは組織的なものであれ、個人的なものであれ、その武力を行使するもの以外の存在を否定するものであり、否定される側の強い反発を招くことは必至である。その結果、武力闘争から無傷の勝利や、他を傷めつけぬ勝利はあり得ないのである。換言すれば、武力闘争には完全な勝者は有り得ないのである。

Sillitoe: It depends on the terms of the fight. When I say there are two losers in the conflict, I mean that both participants in a conflict lose not only their moral qualities, which make them better human being, but they lose materially. They have to spend certain resources—which they can ill afford, in any case—in a conflict which, in the end, is rather useless.¹⁵⁾

国家間の難しい政治的戦略から生ずる武力闘争のこの無意味さを認識する能力が一個人としてのグスマンに備わっていなかったとしても、彼の目の前にいるユダヤ人たちを彼と同じ人間と考えることができなかったのか？彼の目の前にいる一人一人が自分の生に対して固有の権利と責任を持つものであり、何人も自分以外の人間の生を支配する権利は有していないのである。如何なる悲惨な状況下にあろうとも、彼等には彼等の「生」を生きる権利を持つものである。

そうした彼等の「生」をナチズムの種族主義理論と彼等の置かれている状況から軽率に判断して、彼等を殺してやることが彼等を飢えや、寒さ、苦痛から救ってやることだと考えた彼の思考の何処に論理性と知性が伺えるのか？一夜にして財産も家も奪われ、不当かつ強制的に収容され、抗弁の機会すら与えられることのない苦境にあっても、ユダヤ人たちは生への強い執着を持っているのである。

それから私は終わりになお、生命を意味で満たす多様な可能性について語った。私は私の仲間達に（彼等は全く静かにそこに横たわり殆んど動かなかった。せいぜい時折心を動かされて溜息が聞えるだけだった。）人間の生命は常に如何なる事情の下でも意味を持つこと、そしてこの存在の無限の意味はまた苦悩と死をも含むものであることについて語った。そして私は真暗なバラックの中で注意深く聞いている哀れな人々に、われわれの状態の重大さを直視し、かつそれにも拘わらず諦めないことを望み、われわれの戦いの見込みのないことは戦いの意味や尊厳を少しも傷つけるものではないことを意識するように懇願した。¹⁶⁾

この事実は、グスマン自身が身をもって証明しているのである。何故なら多くのユダヤ人を殺害した戦争犯罪人であり、生きる資格のない彼自身ですら逃亡に逃亡を重ねて生きたいと願っているではないか。

‘It is not possible I stay here, because the people have turned. Maybe the Jew told something before he went away, but a man stopped me in one of the alley-streets and said: “Guzman, get out, go home.” ... this is my home. No one understands, that I am wanting to be solitary, to have peace, to labour all right’¹⁷⁾

この言葉は彼以上に何の罪もないユダヤ人たちが言いたかった言葉である。社会主義であれ、共産主義であれ、資本主義であれ、政治そのものが人為的なものである以上、いずれの政治理念もその理念を唱える為政者と支持者にとって都合のいいような理論と制度が導入されるのは自明の理である。それ故政治理念とは特定の集団の利益を代表する理念でありえても、絶対的・普遍的真理であるとは限らない。我々は、絶対的状況下に置かれた場

合、その時代における政治理念や社会通念によって判断、行動するのではなく、絶対的真理と何ものにも左右されない個人的信念に基づいて判断、行動することが最も大切なことである。このことはシリトーが彼の数多くの作品の中で繰り返し述べていることである。

The disclosure of real social contradictions enables Sillitoe's readers to become more conscious of the society in which they live, to develop a firmer grasp over the movement of society. He wants to enlighten his readers to the problems of English society and instill in them a critical attitude towards the world in which they live.¹⁸⁾

ナチズムの政治理念が如何なるものであれ、ユダヤ人の前に立った彼は、絶対的真理と彼自身の信念に基づいて判断、行動する理性を欠き、ナチズムに踊らされたパベットに過ぎなかったのである。

III

現在、追われる身となった彼は、この過去の出来事をどのように見ているのであろうか？彼の話す言葉の中には、彼の不幸は単なる不運であったとする見方が伺えるのである。

'... , you are lucky. So far you don't know what it is to belong to a nation that has taken the extreme lanes, but you will, you will. ... Up till now your country has been lucky, ours has been unlucky. We had no luck, none at all. We are rational, intelligent, strong, but unlucky'¹⁹⁾

彼の言葉の中にはナチズムの引き起こした大戦にたいする、またユダヤ人虐殺にたいする悔悟の情は何処にも見当たらない。むしろナチズムが急進的すぎたためにその目的を完遂しえなかったことを人為的でない「運」の一言で片付けるとは何と論理性を欠いた言葉であらう。彼には、大戦後何十年も経ち、ナチズムの熱狂も消え去った現在になっても、ナチズムを全ヨーロッパを苦しめた偏狭な種族主義として冷静な目で批判、反省するのではなく、今もナチズムに対する強い郷愁を覚えているのである。

'.... He (i.e. Hitler) is truly a great man who can make the different generations understand each other, a dictator maybe, but great, still a genius'²⁰⁾

'.... For most people happiness is letting them follow the habits their fathers developed. But *he* changed all that, that's why we loved him, drilled truths into us that we didn't need to live by habit.

That would be worse than death—because death is at least something positive.’²¹⁾

‘.... Spain I know exceedingly well. This beautiful land we saved from Bolshevism -’²²⁾

‘.... My two sons are in the communist party. As if that was why I fought, used in my body and soul the most terrible energies for one large Germany’²³⁾

彼は正に熱狂的なナチズムの生きた亡霊なのである。だからこそナチズムの崩壊という貞実を冷静な目で見て、その原因を知的・論理的に追求するのではなく、ナチスドイツの敵国であった国々に対して実に勝手な憤りすら覚えるのである。

‘.... My home was in East Prussia: but the Soviets took the family land. They enslaved and murdered my fellow countryman. England, don't laugh. You say they should keep the Berlin Wall there for ever? Ah, you don't know what you are saying. I can see that my misfortune makes you glad. I was not there, of course, but I know what the Soviets did. My wife was killed in one of their bombardments.’²⁴⁾

ある国が他の国を占領、支配することは、決して褒められたことではないが、ナチスドイツの他国の占領や都市の破壊、殺戮を棚に上げて、ソヴィエトのみを非難するのはお門違いというものである。彼の不幸は、一部にはナチズムにその責任があるが、やはり彼自身の思慮のなさを見過ごす訳にはいかない。

最後に、彼の不幸の原因の一つに、彼は政治に巻き込まれたことを上げている。

‘.... You are fed up with politics, you say, and want to leave them all behind? I don't blame you. You are wisdom himself, because politics can make peril for a man's life, especially if he is an artist. It is good to do nothing but paint, and good that you should not linger among this country. Why does an artist sit at politics? He is not used to it, tries his hand, and then all is explosioned in him’²⁵⁾

確かに十分な社会的経験と判断力とを備えていなかった若いグスマンが過激な政治の流れに巻き込まれたことには幾らかの同情の余地はある。しかしこの世に生まれ落ちた者は、多かれ少なかれ何らかの形で政治と関わりを持つものである。程度の差こそあれ、ある社会に属する限り、全く政治と無関係に生きることなど社会の一員として有り得ないことなのである。ジャングルに一人住む人間でない限り、その人の住む既存の社会・政治体

制を盲目的に受け入れようが、一部反発しながらも大部分を受け入れようが、新たな社会・政治体制を求めて反発しようが、何らかの形で人間は社会と政治に関わりを持つのである。ペナーはリチャード・スターンの文章を引用して次のように述べている。

“Sillitoe’s point is unmistakable: our personal confusions may be mitigated by any ‘system of social life’ that comes to ‘involve us deeply,’ but there are hideous systems and involvements as well as humane one. Through his art, Sillitoe asks us to make a choice.”²⁶⁾

大事なことは、そういう時に我々が関わりを持つ社会の政治的体制や理念が特定の集団のものではなく、総ての人間の平等と自由を求めるものであるか否かを見極める知性を本人が持っているかどうかである。その知性を身につけるために我々は闘争心を外に向けるのではなく、自分の内に向け、自己を啓発し、人類の平和のために働き、現在の社会制度の不備や欠点を批判する目と能力を養わなくてはならないのである。これこそ人間の闘争心の正しい方向付けといえるのである。

Sillitoe: Well, maybe we do lead tragic lives in that death is the end of every life. On the other hand there are conflicts and conflicts. There are conflicts which are wasteful of human resources and then there are creative conflicts, which is somehow bringing it up to another sort of level—which enables you, in fact, to create a better life. Your fighting is on a different level²⁷⁾

従って政治との関わりをグスマンの不幸の一因と考えるのは不合理であり、むしろ彼が関わりを持ったナチズムの本質を論理的に解明しえなかった彼自身の知性の無さを認識すべきである。

結 語

以上三点から、グスマンは、彼自身が語る程、論理的、理知的な人間ではなく、単にナチズムの唱えるドイツ国民の論理性、合理性、理性の優秀さといった *fantasy* に取り付かれた無知で非論理的な人間であったに過ぎない。*fantasy* が如何に危険なものであるかについてシリトーは、*A Tree on Fire* において次のように述べている。

Fantasy is what you strive to bring about against reason and sense. Leave it alone. Call it fantasy if you like, but enjoy it in dreams Fantasy works against you, chops across the grain of your true personality like an axe. Only if it ultimately destroys you is it worth while.²⁸⁾

幻想は我々の理性と分別を殺し、我々を盲目の狂気へと追いやる麻薬である。我々は常に如何なる状況下にあっても、自分の理性を頼りとし、普遍的真理に基づいて論理的に判断し、行動することが大切なのである。それを怠ったグスマンの不幸は当然の成り行きであり、決して同情しえるものではない。現にグスマンの話を聞いているクリスからは一言の同情、理解の言葉も発せられていない。幻想に取り付かるたグスマンの過去の総ての行動と現在の弁明を否定するクリスの気持ちは、最後の一言にはっきりと表明されているのである。

‘That crazy Nazi,’ he thought, ‘can’t even mend a bloody car.’²⁹⁾

Notes

- 1) Alan Sillitoe, *Guzman, Go Home and Other Stories* (London: W.H. Allen, 1979), p.157.
- 2) Ibid., pp.150-151.
- 3) Ibid., p.163.
- 4) Hans Rothfels, *Die Deutsche Opposition Gegen Hitler*
片岡啓治・平井友義訳『第三帝国への抵抗』, 弘文堂, 昭和38年, p.25.
- 5) Alan Sillitoe, op. cit., pp.163-164.
- 6) Hans Rothfels, op. cit., p.13.
- 7) 岡部健彦著, 『世界の歴史』, 第20巻 二つの世界大戦, 講談社, 昭和53年, p.257.
- 8) Hans Rothfels, op. cit., 第一章「ドイツ反ナチ運動」を参照
- 9) Alan Sillitoe, op. cit., p.163.
- 10) Ibid., pp.173-4.
- 11) Ibid., p.176.
- 12) Alan Sillitoe, *The General* (London: W.H. Allen, 1979), p.127.
- 13) Ibid., p.66.
- 14) Ibid., p.64.
- 15) John Halperin, “Interview with Alan Sillitoe”, *Modern fiction studies*, summer 1979, volume 25 number 2 p.185.
- 16) ヴィクター E. フランク, 霜山徳爾訳, フランク著作集 1 『夜と霧』, 昭和38年, みすず書房, p.197.
- 17) Alan Sillitoe, “Guzman, Go Home”, p.173.
- 18) Ronald Dee Vaverka, *Commitment as Art A Marxist Critique of a Selection of Alan Sillitoe's Political Fiction* (Stockholm: Almqvist & Wiksell International, 1978), p.124.
- 19) Alan Sillitoe, op. cit., p.164.
- 20) Ibid., p.165.
- 21) Ibid., p.171.
- 22) Ibid., p.171.

- 23) Ibid., p.172.
- 24) Ibid., pp.171-2.
- 25) Ibid., p.155.
- 26) Richard Clark Stern, “Guzman, Go Home and Other Stories,” *Saturday Review*. LII (November 22, 1969), 86 quoted in Allen Fichard Penner, *Alan Sillitoe*. (New York: Twayne Publishers, Inc. 1972), p.71.
- 27) John Halperin, op. cit., p.185.
- 28) Alan Sillitoe, *A Tree on Fire* (London: W.H. Allen, 1979), p.11.
- 29) Alan Sillitoe, op. cit., p.176.

On “Guzman, Go Home”

—Guzman's fantasy—

Toshihiko U_{EKI}

*Faculty of Liberal Arts and science,
Okayama University of Science
Ridai-cho 1-1, Okayama 700, JAPAN*

(Received September 30, 1986)

Rationality is one of the most important qualities that make man a human being, therefore a human being, under any circumstances, must behave rationally and intellectually.

The speaker, Guzman, of “Guzman, Go Home” also believes himself rational and intellectual. In spite of his rational and intellectual behavior when he faced miserable Jews trembling in the cold and suffering from hunger, he now lives the life of a suspected war criminal. He insists the cause of his misery is due to his rationality and intellectuality.

In this paper I want to analyze whether he is rational and intellectual as he insists or not.